

【研究ノート】

資本の価値と価値喪失過程

勝 村 務

研究ノート

資本の価値と価値喪失過程

勝 村 務

はじめに

1. 「資本」章の位置づけ
 - 1-1. 「貨幣の資本への転化」と三形式論
 - 1-2. 資本循環論の位置づけ
 - 1-3. 「資本」章の課題
2. 価値喪失過程と資本の価値
 - 2-1. 価値表現のやり直し
 - 2-2. Pあるいは(P)
 - 2-3. 循環への意志と価値の評価
3. 「資本の価値」と原論体系
 - 3-1. 貨幣論と信用論の媒介項
 - 3-2. 「資本」章の意義

おわりに

はじめに

「貨幣の価値と価値形態論」と題した小論(勝村[1999])において、貨幣の価値の特質について扱い、貨幣が商品世界における唯一の富の定在として立ち現れることになる事情について検討した。本稿では、貨幣に続いて組上に上げられるべき資本について、その価値の特質に着目して論じていく。

マルクス経済学は、資本主義経済の特殊歴史性を強く意識する経済学のことでありと筆者は諒解しているのだが、近年、「市場経済の理論」と銘打ってマルクス経済学の原理を論じることも多いようである。しかし、この言い換えには大いに注意が必要である。

われわれは、むしろ、資本の規定と市場の基本構造との理論的対応関係に注意を払うべきであり、それにより資本主義経済の特質を

明らかにしていくべきなのではないか。そして、その検討は、本稿の後半においても扱うように、貨幣現象をめぐる貨幣論と信用論の重層的関連の意義についても、一定の展望を与えることになるのではないだろうか。

貨幣論によって説かれるような市場の特質と資本概念との対照性を際立たせることは、経済原論の重要な課題であると考えられるし、資本の運動をベースとした信用関係の形成をこの枠組みのもとに捉えることはまた貨幣論にも成果を投げ返す可能性をも内包しているものと思われる。

資本は価値の運動体とされているが、そもそも「資本の価値」とはどのようなものなのか、その規定は十分に展開されてきているとは言いがたい。本稿では、『要綱』の「価値喪失過程」の指摘について、価値形態論の視点を援用しつつ検討することで、「資本の価値」の問題を確定していく。そこでは、資本循環論の形成史も視野に入れることになる。価値の運動体として資本を捉えようとする場合、市場の構造を分析する概念としての価値がどのような規定を受け取ることになるのか、というのが本稿の主題である。

近年、資本主義経済の中に、積極的に活動の場を得ようとする資本以外の主体、たとえば、NPOなどの存在が注目されている。NPOなどの主体と資本との理論上の距離を正確に測り、そうした主体の意義を過不足なく評価することも課題となってきている。

原論における「資本」章の意義を問い直し、資本概念や「資本の価値」の観念について理論的に精査していこうとする本稿の試みのこうした射程をも意識しつつ、行論に入っていくこととしたい。

1. 「資本」章の位置づけ

1-1. 「貨幣の資本への転化」と三形式論

マルクスは、『資本論』第1巻において、宇野弘蔵のいわゆるところの産業資本的形式の範式 ($G-W \cdot \cdot P \cdot \cdot W'-G'$) を一度も用いていない。いわゆる商人資本的形式 ($G-W-G'$)、および、金貸資本的形式 ($G \cdot \cdot \cdot G'$) の範式は、それぞれ明確に第4章「貨幣の資本への転化」の箇所において掲げられているが、産業資本的形式の範式は、「貨幣の資本への転化」はおろか、後の剰余価値生産を論じる部分や蓄積論においても登場していない。それがはじめて掲げられるのは、第2巻にはいって資本循環論においてなのである。

『資本論』解説書において、「貨幣の資本への転化」や続く剰余価値生産・蓄積を扱う各章について述べる際に、産業資本的形式の範式(資本循環論における貨幣資本循環の範式)を掲げているとすれば、それは後知恵として第2巻の知見を活かしながら、第1巻の内容を記述しているのである。

原論体系において、剰余価値生産を扱う「資本の生産過程」の本論部分なり、宇野がそれを再構成した「生産論」なりが、産業資本的形式の範式の把握を踏まえた上で展開されるのかどうかは、行論にかなり大きな相違をもたらすものなのではないだろうか。

資本の一般的定式について述べた後、価値増殖の根拠を問いながら労働力の売買の議論から剰余価値生産について論じていくのが『資本論』の「資本の生産過程」論であり、第2巻「資本の流通過程」論は、はじめて産

業資本の運動の全体を捉え返すという意義を画するものとなっている。商品の価値の生産への着目から資本の価値への視野の拡大、生産過程の流通過程としての資本の運動全体への包摂という把握は、この「資本の流通過程」論ではじめて打ち出されているものとみることができよう。

「資本の生産過程」論の本論部分を導く「貨幣の資本への転化」では、2つの範式、 $W-G-W$ と $G-W-G$ の比較論から、 $G-W-G$ が導かれ、その後、この $G'=G+\Delta G$ への価値増殖の根拠をどこに求めるかが論じられている。これは、剰余価値論や生産論の導入を担っているが、その後の「資本の生産過程」論の行論において、価値尺度論や流通手段論の知見は後景に退きがちとなる。

この $W-G-W$ と $G-W-G$ の比較という視点は、マルクスの『資本論』形成史において、すでに『経済学批判』より登場している。市場における商品 W と貨幣 G の非対称性を説く価値形態論は、『資本論』初版ではじめて展開されるのであり、『経済学批判』における $W-G-W$ と $G-W-G$ の比較論は、 W と G の非対称性を意識した議論とはなっていない。

『資本論』における資本概念の導出が、「商品流通の中からどうして $G-W-G$ という流通形態が展開されることになるのか、これはその両極に量的相違がなければどうして無内容なのか、といった問題は不問に付されたまま」(山口 [1976]) となっているのも、無理からぬところなのである。

このように、『資本論』の「貨幣の資本への転化」は、剰余価値生産を論ずる「資本の生産過程」本論への導入となっていた。

これに対し、原論体系の冒頭より労働価値論を排し、「流通論」という理論場を設定することとした宇野においては、資本概念を提起する「資本」章についても、独自の構成が求められることになった。そこで宇野が採っ

たのが、商人資本的形式・金貸資本的形式・産業資本的形式の三形式からなる資本形式論という理論構成であった。

そこでは、商品・貨幣を論じた延長上に、流通形態論として、商人資本的形式の運動を導き、金貸資本的形式にも関説した後、価値増殖の社会的根拠という問題意識のもとに産業資本的形式を説いているのである。価値増殖の社会的根拠への着目は、『資本論』の「貨幣の資本への転化」に通じるものであるが、資本概念についての章を産業資本的形式の運動の範式を示すかたちで終わっているという点は、宇野原論の展開が『資本論』と異なっているところである。

宇野においては、「流通論」から「生産論」への橋渡しという役割が「資本」章に求められることにもなり、産業資本的形式の導出が焦点とされることになったのである。

宇野原論にあっては、産業資本的形式が流通形態としての資本の規定とはじめから関連づけられて捉えられており、資本による生産過程の包摂という視座が与えられた上で、生産論の展開に移行することになっている。生産過程は、資本の運動全体の一局面であることが「資本」章で明らかにされたうえで、生産論において詳しく扱われていく。この宇野の方法においては、「生産論」のなかで「資本の生産過程」が説かれた後に「資本の流通過程」が特に何かの視座を新たに提供しうるのかどうか、という問題が出てくることにもなる。

ここで、Pm も A も含むかたちでの産業資本的形式についての範式、すなわち、

$$G - W \left\{ \begin{array}{l} P_m \\ \cdot \cdot P \cdot \cdot W' - G' \\ A \end{array} \right.$$

という範式が、理論展開上、どこの箇所ではじめて挙げられているのかについても確認しておこう。

マルクスは、『資本論』において、この範

式を第2巻「資本の流通過程」の資本循環論において、登場させている。宇野は、とりわけ新原論においては明確に、「資本」章の宇野流の三形式論において、産業資本的形式として、この範式を示している。

ここで注目すべきは、宇野の体系構成に再検討を加えている山口重克である。山口原論では、「生産論」の「資本・賃労働関係の再生産」の再生産表式論の箇所で、これがはじめて扱われているのである。山口の「資本」章の展開は、後述するように、資本循環論の扱いなど、いくつかの点で独特の特色をもっており、この範式の扱いもそれに伴っての処理であったと考えられる。

この項で見てきたように、資本循環論の位置づけは、資本概念を導出する章の扱いとの関連が大きい。次項では、資本循環論の意義について、形成史を瞥見することにした。

1-2. 資本循環論の位置づけ

資本循環論はマルクスが独自の領域として構想した理論分野である。

資本循環論が収められた『資本論』第2巻第1篇「資本の諸変態とそれらの循環」については、従来、そのなかの「第6章 流通費」についての議論が活発であった。その際、流通費用論は、価値形成・増殖との関連、つまりは第1巻との関連という観点から扱われる側面が強かった。

裏を返せば、マルクスがこの独特の部分としての『資本論』第2巻第1篇、ひいては第2巻全体で何を行おうとしていたのかについて、あまり論じられてはこなかったともいうことができる。

経済原論の体系的な記述においては、たとえば入門・啓蒙的な色彩の強いものでは資本循環論をカットして資本回転論から「資本の流通過程」論を論じ起こすものも現れている。また、山口原論のように、資本循環論・資本回転論を発展的に解消し、その内容を他領域

の行論の中に活用するかたちを採る処理も出てきている。資本循環論の鼎の軽重がようやく本格的に問われるようになってきたともいえる。

「資本の流通過程」論・資本循環論はマルクスの経済学批判体系の構想の中ではわりと早い段階から登場している。

『資本論』形成史研究においては、マルクスの最初の体系的構想のメモとされている『要綱』(いわゆる1857-58草稿のことで、本稿では『要綱』と略記する)で、「資本に関する章」のなかではすでに、全体の三部構成はかたちのうえでは採られていたものと考えられている。それに先だって「貨幣に関する章」が別に立てられている。「資本に関する章」の第2部にあたる部分は、こんにち、「資本の流通過程」論にあたるものと位置づけられている。その内容・構成は雑然とはしているが、MEGAの校訂に従えば、資本循環論にあたるものと整理することのできる部分も、すでにそこにあった。

内容的に未整理であるとはいえ、本格的に経済理論の体系構想に着手した時点ですでに、独自の領域として「資本の流通過程」論・資本循環論を論じる必要をマルクスが感じていたというのは興味深い。

その後、「資本の流通過程」論についてのまとまった叙述は1864-5年の『資本論』第2巻の初稿まで現れない。エンゲルス編集の現行版第2巻には、この初稿の文章は採用されていない。

この間のマルクスの仕事は第1巻に対するものが当然のことながら中心であるが、第2巻の執筆は第3巻の草稿執筆の途中になされている。かなり難航しながらいちばん後回しにされざるをえなかったようであり、1863年頃の体系構想シラバスなどによれば、第2巻の第3篇が再生産論であることは早くから確定しながら、第1篇・第2篇、つまり現在の資本循環論と資本回転論の位置をどういうテ-

マのものとするかの決定に苦心していたようでもある。ただし、利潤論研究の進展に対応して、後の資本回転論にあたる部分の研究そのものは進められていたようではある。

『要綱』段階と『資本論』草稿段階での「資本の流通過程」論・資本循環論の相違は、流通形態論としての資本把握の深化として、第1巻における「貨幣の資本への転化」における資本の一般的定式の議論の完成と関連づけて捉えられてきている。『要綱』段階では「資本の流通過程」が商品売買の流通過程の局面を意味するものとして扱われていることが多く、それが『資本論』草稿段階では流通形態としての資本循環全体を「資本の流通過程」と把握するという認識の深化が見られており、それは第1巻での資本の一般的定式の流通形態としての把握に対応しているといえるのである^②。

1-3. 「資本」章の課題

宇野原論やその理論構成を継承する論者の原論は、「資本」章や資本循環論の扱いに、議論の余地を残してしまっていたように思われる。流通形態論の独立化や「生産論」の提起などにより、『資本論』とは、資本概念導出の章(「資本」章)や資本循環論の課題が大きく異なってきたはずにもかかわらず、「資本」章での増殖根拠論や資本循環論での三循環形式論(G-G循環、P-P循環、W'-W'循環)を『資本論』から引き継いだままになっているなど、資本という、原論にとってもっともキーとなる概念を扱っているにしては、やや不用意な面が残されている観がある。

佐藤 [1993]、とりわけその第1章である「資本循環論の検討」は、少なくとも資本循環論についてみるかぎり、山口原論における「資本の流通過程」論の処理をもあろうる処理のひとつと踏まえながら論じているほとんど最初の論考と見ることができるよう思わ

れる。

直接の検討の対象としては、現行版『資本論』第2巻が扱われているが、その議論は、山口原論における「資本の流過程」論の整理、すなわち、資本循環論・流通費用論を資本概念論へ、資本回転論を利潤論へ、という処理が、「資本の流過程」論の内容の意義を消極的に捉えた結果ではなく、むしろそれを積極的に展開するための方法であったということの結果として浮き彫りにしている面がある。

資本循環論については佐藤論文は大きく三つの主張を行っている。

まず、変態と循環の区別の重要性をマルクスをも批判しつつ指摘し、変態論の意義は資本概念論（資本形式論）において説かれることでより深められるとしている。さらに、『資本論』以来、資本循環論の中心的な論点となってきた三循環形式論についてその意義に否定的な見解を採る。そのうえで、『資本論』の資本循環論のなかに循環運動の現実的様相と条件を論じる視角が点在していることを指摘し、むしろその点に流通費用論や資本回転論の基礎を準備する意義を見出している。それはどうやら循環運動の考察を踏まえることで、費用・回収関係という捉え返しを資本の運動に対して行うことが可能になるという面を意味しているようである。

また、山口 [1976] では、増殖根拠論において、流過程における差額の発生を考慮の外におくべきではない、との指摘がなされている。資本の概念を提起する段階では、個別資本の増殖が問題にされるのであって、そこでいきなり資本が社会的再生産の基軸となっている状態や労働力が商品化している状態を前提して議論するべきではない、というのである。

『資本論』や従来の多くの原論の「資本」章には、価値総額の増加と個別資本の価値増殖＝利潤獲得との混乱がみられる。資本の運

動の理論的導出を個別資本に焦点を置いて行う理論場と、体制としての資本主義経済の存立を価値増殖と関連して検討する議論とは、いったん分けておく必要があるようである。

こうした、佐藤や山口の指摘を鑑みるに、流通形態としての資本概念そのものの掘り下げがあらためて必要となっているものと考えられる。資本概念に至る、価値形態論から一連のものとしての論理構成の模索が、求められているのではないだろうか。

貨幣は価値形態論の論理のもと、商品とは対照的に、価値の定在たる性格を与えられるのであった。こうして商品経済のなかで唯一、その価値性格が確立されているからこそ、貨幣は商品の価値を測る物差したりうることができ、価値尺度機能を果たすのである。

資本は増殖する価値の運動体と定義づけられながらも、形式的には価値増殖というよりむしろ貨幣増殖と見たほうがより正確な規定なのではないか、と疑義が呈されうる余地も持っている。しかし、貨幣の価値定在性についての理解を踏まえるならば、価値増殖が貨幣増殖であらねばならない必然性が理解できるのであり、資本の本質と形式とは齟齬のないものとなるのである。

資本とは、 $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow D \rightarrow \dots$ というように諸商品を転がしていくなかで価値増殖を図ることを指すものではない。この $A \cdot B \cdot C \cdot \dots$ という諸商品群の中のひとつが貨幣商品であると見たとしても、まだ把握は不十分であるといわざるをえない。

先回りして言うならば、資本概念がいったん完成した暁には、 $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow D \rightarrow \dots$ という転売による価値増殖も、資本のありかたの一変種と考慮しうようになる。しかし、資本概念の定立にあたっては、価値の定在たる貨幣への志向、そして、商品と貨幣の非対称な価値性格を踏まえて行われる「変態」と呼ばれる運動にまつわる問題に着目しておく必要がある。

2. 価値喪失過程と資本の価値

2-1. 価値表現のやり直し

資本は「増殖する価値の運動体」というようにして流通形態として規定され、そのいっぽうで価値概念についても価値形態論などを通して、商品・貨幣に付着しているものとして概念把握がなされている。そして、このような理解を端的に表すものが $G-W-G'$ という資本の一般的定式である。

$W-G-W$ と $G-W-G$ の比較は、増殖という契機の導入として論じられてきた。

しかし、商品と貨幣の形態的相違に着目するならば、 $W-G-W$ と $G-W-G$ という二つの過程は、そもそも簡単に同列に論じられないものであることに気付く。 $W-G-W$ を措定するようには、 $G-W-G$ は当然には措定しえないのである。

先にも触れたように、 $W-G-W$ と $G-W-G$ の比較は『経済学批判』でも行われている。この比較論は、価値形態論形成以前の議論水準に根ざすものであると見ることができる。

流通形態としての商品と貨幣の価値性格のありようについて、確認しておこう。

商品とは、交換に供されているものである。売ってしまった商品は、交換性たる価値を失う。「売れたときはじめて使用価値として役に立つことができるのであるが、そのときはもはやそれは商品ではなくなっている。」(日高原論)、「商品はその所有者にとって他の何らかの有用な商品と交換されるべき物である。」(山口原論) というのは、流通形態論の基礎となるべき点である。

貨幣は交換を経てもなお貨幣であるが、商品は交換において価値が実現されるならば、理論上、商品ではなくなるものである。したがって、 $W-G$ とそれに続く $G-W$ は、貨幣によって接合することができるが、 $G-W$ に

$W-G$ を簡単に接ぐわけにはいかないのである。

価値実現とともに商品は商品ではなくなり、使用価値実現の対象となる。原則としては、生産物が商品となる場合、使用価値生産→価値表現→価値実現→使用価値実現、という順にステップが踏まれることになる。

価値表現において、商品は売りに出され、値付けされるわけだが、生産に先立って売りに出すことがあらかじめ予定されているにせよ、使用価値生産の過程の完了によってはじめて販売への条件が整うのであって、使用価値生産→価値表現の順は揺るぎないものと考えられる。

価値実現によって所有の移転があつて、商品ははじめて使用価値実現＝消費の対象となるが、そのとき商品はもはや交換に供されているものではなく、単なる使用価値物となっている。飲食の精算のように、支払いが消費の後になる場合も、価値実現→使用価値実現が転倒しているのではなく、支払いの形式のバリエーションの問題と考えられるべきであろう。

商品の転売は、価値実現がなされた後に改めて売りにだされているものと考えられることができる。この点、次の小節でさらに検討するとして、貨幣についての確認に移る。

貨幣を流通手段として考察する際に引き合いに出される図、商品が流通界＝市場に価値表現によって登場し、貨幣を踏み石として命がけの飛躍を果たして流通界を飛び越え、消費の領域へと退出していくというあの図は、商品と貨幣の非対称な性格を明らかにするものであった。交換という本来は対称性と親和的であるはずの関係が、貨幣と商品との交換においては非対称性が特色となるということ。そこで貨幣は、流通界に登場しては去っていく商品とは対照的に、交換を繰り返し経験しながら流通界に留まり続ける。

貨幣は、交換を経験する前も後も貨幣であ

るという点に変わりが生じるものではない。これは貨幣の独特の価値性格が商品の価値表現によってもたらされていることによるものであって、諸商品からもとめられていることによる価値の一般的性格と、直接的交換可能性に由来する価値の定在という性質が、貨幣を一般的富の定在として流通界に留めつづけることになる^{③④}。

商品と貨幣のこのような性格を前提に、貨殖を図るとするならば、どのようなことが考えられるか、というのが、資本概念へのステップとなろう。

貨幣にできること、それは、買うことである。したがって、貨幣からの運動の始動は、 $G-W$ となる。他方、貨幣を得るには、商品売るしかない。そこで、貨幣への復帰は、 $W-G$ でなされるということになる。ここから、さしあたり、 $G-W \cdots W-G$ 、という運動が考えられる。

資本の一般的定式は、 $G-W-G'$ とされている。

しかし、貨幣は交換を経てもなお貨幣であるが、商品は交換において価値が実現されるならば、理論上、商品ではなくなるものなのであって、 W をブリッジにして $G-W$ と $W-G$ 、ないしは $G-W$ と $W-G'$ を簡単に接いでしまうわけにはいかない。いったん、 $G-W/W-G'$ というかたちで過程を検討しておく必要があるのではないだろうか。

商品の転売において、たとえば骨董品・美術品の鑑賞と転売のように、さしあたり当座すぐに転売することは考えずに商品の購入を行うことも考えられる。その場合、購入した商品は、書画が購入者のもとで鑑賞に供されるというようにして、使用価値の消費に入る。その後、転売の必要が生じるとすれば、あらためて市場に売りに出し、なにがしかの価格付けを行うことになる。したがって、この場合、価値表現→価値実現→使用価値実現→価値表現となり、やがてそこに価値実現が続い

ていく。購買と販売の間には切断面が明確に観察され、まさに $G-W/W-G'$ と見ることができよう。価値表現のやり直しを重要な契機と見出すことができ、これが最初の G と後の G' との量的差異をもたらすものとなる。

あらかじめ転売を予定して購買を行う場合、購買の後に使用価値実現の消費過程が続くことはない。しかし、異なる価格で購買と販売を行う以上、価値表現のやり直しという契機をそこに観察することができる。転売を予定している以上、いったん購買した商品は直ちに次なる交換に供されるべき存在となるのであって、ここでも商品であることをやめるわけではないが、価値表現のやり直しの契機として、切断面を見出すこともできる。

逆に言えば、価値表現のやり直しという契機が同様に観察されるとはいえ、あらかじめ転売を予定して購買を行う場合、つまり、資本としての運動である場合は、購買した商品が直ちに次なる交換に供されるべき存在となるため、切断面はやや消極化されることにもなるのである。この点、本稿の行論にとっては重要な点となっていく。

この切断面についての指摘は、山口原論に見出すことができる。

山口原論の「資本」章は、方法・体系の処理として、いくつかの特色をもっている。いわゆる産業資本的形式を「商品生産資本的形式」とするなど、資本形式の名称を抽象化していること。三形式の順序として、産業資本的形式（山口原論においては「商品売買資本的形式」）を金貸資本的形式（山口原論では「貨幣融通資本的形式」）の前にもってきていること。資本循環論を「流通論」の資本形式論に、資本回転論を「競争論」の利潤論に吸収し、資本循環論の変態論としての側面を資本形式論にとりこみ、循環の三形式論はなくす。Pm や A を組み入れた範式は再生産表式論のところ初めて登場。符号 P は生産の表示とする。といった諸点である。これらの

意味については、また触れるとして、ここでは、まず、先の切断面の指摘について見ておく。

山口原論では、産業資本的形式において、購買した商品は生産過程での費消され、そこで価値はいったん消滅し、製品の価値は新たに形成される、という関係にあることと説いている。そして、商人資本的形式においても、価値の保存則があるわけではない。価値の切れ目はここにも存在している、と指摘している。「価値の力学的な保存則のようなものが存在しているわけではないのである」、「資本家的活動によってそれは資本として連続的運動体となるのである」とされているのである。

山口原論では、個別資本の運動における価値増殖の根拠として、売買差額の要因を考慮のうちに含めている。流過程における売買差額を増殖の要因として考慮していくにあたって、価値表現のやり直しの問題がクローズアップされることになり、「価値の切れ目」を説くことになったものと考えられる。

マルクスも、『資本論』には痕跡を残していないが、『要綱』においては、「価値喪失過程」についての指摘がある。

「資本の流過程」とMEGAで題された部分の冒頭では、相対的剰余価値の生産につながる価値喪失も指摘されるが、ここでの本論ではないとされ、本論として、「資本が貨幣の形態から商品の形態に、つまり実現されるべき一定の価格をもった生産物という形態に、移行してしまった、という価値喪失である。資本が貨幣として存在していたときには、それは価値として存在していた。いまでは資本は生産物として存在しており、観念的に価格として存在するだけで、価値そのものとしては存在していない。」という指摘がされる。

「価値表現のやり直し」ともいうべき事態を指摘しているわけではないが、ここで、商品と貨幣の非対称な価値性格が問題にされているものが見ることができる。

2-2. Pあるいは(P)

山口原論では、商人資本的形式でも存在している「価値の切れ目」は、産業資本的形式で、いっそう明確になるとされている。産業資本的形式では、この切断面に、生産過程が挟み込まれることになる。

マルクスは『要綱』において、実はこの生産過程における資本の価値の問題から「資本の流過程」論全体を説き起こしているふしがある。『要綱』の「資本の流過程」論は、商品売買の流過程の局面に焦点を合わせた検討がなされているものと見られているのであったが、その冒頭に位置する「資本の生産過程と蓄積」という節や「資本の循環」の節では、しきりに「価値喪失過程」としての生産過程を経ることで価値増殖が行われるということが強調されている。

この価値喪失過程の認識は、商人資本的形式においても購買と販売の切断のところに認めるべきなのであって、ここに資本循環の危うさを看とることができる。

先に山口原論を引用したように、このような資本の価値の運動体としての切れ目の問題は、始点への復帰とその繰り返しという「循環」の契機をとおして一連の流通形態としての定式に組み込むことで解決され、そこにはじめて変態としての視点も提起できるものとも考えられる。 $G-W/W'-G'$ という見方を、資本の運動についていったん採ることで、このような事情がはじめて浮き彫りになる。

産業資本的形式なり資本循環なりを考えた場合、GやWに関して価値を想定するのは問題ないとしても、Pの部分、つまり生産過程の局面における資本の価値としてのありかたに関して、どのように考えられるべきであるのかについては疑義が生じてくる。

これに付随して、そもそもPとは何か、という問いも日高 [1977]・大内原論によって提起されている。マルクスにおいても、叙述においてPの捉えかたに混乱がなしとはしな

いようであり、諸論者によってもPの捉えかたには相違がある。Pを生産資本とする場合、そこに変態途上のある価値の大きさを見るのか、たんに仕掛品をはじめとするモノなどの集合を指すのか。あるいはWと生産資本の相違や生産過程の局面にある運動体の価値性格を問題にする立場からPとは生産過程の存在を示す印であり、むしろ括弧付きで(P)と示すべきである、という主張もなされる。

P, ないしは(P)の局面にある資本の部分について、その価値としての性格や価値の大きさを問題にするというのは、資本概念の彫琢の試金石という意味があるほか、個別資本全体の価値評価はいかになされるのかという問いをたてていることにもなり、企業価値の測定という問題に通じる面をも持っている。そこでは、買入れたWの価値の大きさをそのままPの価値評価に適用する、という会計上の原価処理のもとに理論をたてることは是非問われなければならない。

本稿では、「価値の切れ目」への着目が、資本の価値の独特なありかたを浮き彫りにする、という面を重視している。その視点からすると、せっかく「価値の切れ目」の問題に注目しているにもかかわらず、山口原論が記号Pを生産の存在を表す符号と位置づけているのは、些か理解しがたい。「価値の切れ目」の存在を指摘するのみに終わるのではなく、それが消極化されるかのような様相を呈するのが資本の価値のありかたなのである、ということをお説くことこそ、「資本」章において重要なのではないだろうか。

2-3. 循環への意志と価値の評価

「資本家的活動によってそれは資本として連続的運動体となるのである」(山口原論)。

「価値の切れ目」の問題があるにもかかわらず、資本がその運動のあらゆる局面において、価値を指定することができ、価値の運動体となることのできるのは、循環への意志が

あるからとされている。

この、評価による価値の大きさの指定という契機を考慮するならば、記号Pで表されてきた生産資本も、ある価値の大きさを担っているものと考えることができる。

商品・貨幣・資本という流通形態は、それぞれ独特の価値性格をもっている。

資本も「資本の価値」を量的に想定することができる。それは、資本の運動体全体についての価値であり、商品(自ら販売している商品の店頭在庫を含む在庫)と貨幣のみならず、仕掛品や固定資本などを含んだ価値である。商品でも貨幣でもないこうした存在にも価値を見出すことができるのは、それらが資本の運動の一部を構成しているからであって、ここに評価という契機を含むものとしての「資本の価値」という概念が提起されることになる。

商品と貨幣は非対称な価値性格をもち、唯一の価値の定在としての貨幣への致富衝動が、資本の運動の背後にはあった。増殖を求め、資本は運動の場を移すという部門間移動を行うものとされるが、そうした部門間移動は、姿態変換運動が貨幣に復帰した局面において可能となる。したがって、資本概念の基底には、単なる価値増殖にとどまらず、貨殖(貨幣増殖)という契機が刻印されているものと考えられる。

しかし、そうして開始された資本の運動は、「資本の価値」という認識を可能にしていき、価値喪失過程の問題を消極化する。このことは、「資本の価値」という評価を通じて、運動のなかに混在する諸要素の価値性格の相違が消極化・一様化されていくことを意味している。資本は、いつでもその運動体としての全体が売りに出される状態にあって、換金化され別の投資へ向かうものであると考えられるようになるのである。

循環するものとしてあり、また一旦緩急あれば他の部門に移動することも辞さない存在

としてある、ということが、資本の特質であり、GもWもPもひとしく資本の一部を構成するものとされるということ。そこでは、循環への意志、循環の可能性、が価値評価の根拠として重視されることになっている。

このことは、こうした評価を可能にする根拠が揺らいだ場合に、資本に独特の価値の存立のありようが疑われてこざるをえなくなってしまう、という裏腹の面をも論理の内に含んでいる。

価値の具体的な量的規定は、原価による認識を軸に方法が模索されなければならないだろうが、このように、商品と貨幣に還元しきれない「資本の価値」の概念が醸成されることで、「増殖する価値の運動体」という規定が可能になる、ということが「資本」章において重要である。

そのために、理論上、いったん $G - W / W - G'$ と把握する必要があるのであって、「資本の価値」は、「資本の流過程」の成果として展開されることになるのである。

3. 「資本の価値」と原論体系

3-1. 貨幣論と信用論の媒介項

資本の運動が順調に推移することを見越した活動という、原論体系において、手形による購入などの信用関係の形成が想起される。将来の貨幣還流への信頼、あるいは、具体的に生産資本たる現物を購入しているということとその根拠として、信用は形成される。

信用は、ここでの評価の問題としての資本価値を前提としており、貨幣と信用貨幣との間の流通根拠の性格の相違があらためて強調されるべきであろう。

小幡 [1999] に指摘されているように、貨幣論と信用論との転轍については「資本の流過程」論、とりわけ資本循環論の意義が重要なのではないと思われる。

貨幣論からそのまま直接に信用貨幣を論じ

る理論構成が採られないのはなぜか、という貨幣論と信用論の位相の違いが主題である。従来の研究で明らかにされてきた信用を可能とする契機を、資本循環・資本価値の視点から捉え直す。そこでは、将来の貨幣還流と資本価値評価との関連などが問題となる。また、財務諸表・会計監査の信用における意義が理論上の中心的問題として扱われるとともに、価値破壊と恐慌について関説しながら「資本の価値」の特質があらためて論じられる必要がある。

貨幣の実在性とは貨幣の富としての性格であり、その実在性を前面に出すことで明らかにされるという市場の像は、貨幣を捨象した商品相互の交換関係を抽象化しえない、貨幣と商品との対極的な存立であり、貨幣と商品との価値性格の相違や商品の滞留という特色である。

貨幣論と信用論は、たんにともに貨幣現象を扱っているという点で関連しているわけではない。それだけならば、むしろ、なぜ二つの理論場が経済原論体系の中で大きく離れた位置で論じられなければならないのかがかえって疑問ともなろう。

貨幣論において、掛け売買に触れることを通じて、信用関係の萌芽を説いていこうとする試みも見られるが、二つの理論場の意義は意識しておく必要がある。

貨幣論で解明された市場の基本構造は、売りと買いの分離のなかで流過程の不確定性の問題を資本につきつける。

信用論は、商業資本論とともにこの流過程の不確定性という資本の活動にとっての制約を解除する競争機構の問題として論じられるのであり、その意味で貨幣論は信用論の基礎をなしていると見ることができる。

資本は、本来、運動の中で価値性格の異なる部分を通過する変態を行っているが、循環を順調に行って価値の維持・増殖を達成する範囲では、変態のこうした性質は消極化して

捉えられるようになる。ここまで見たように、P部分も「資本の価値」の一部を構成することとなる。存立する諸資本の運動を基軸に経済を編成している資本主義経済においては、WやPはGとの価値性格の相違を消極化され、信用の形成が可能になる。

貨幣形態の存立は貨幣価値の安定に支えられており、これは諸資本の競争を通じた価格メカニズムの機能に根拠づけられている面がある。貨幣形態を現実にもつ通貨は信用機構を通じて供給されている。こうして、資本主義的なありかたが市場の基礎をなす商品・貨幣関係を支えている面もある。

現代の単一中央銀行券において、貨幣論的契機と信用論的契機がどのように組み合わせられ、貨幣価値の変動はどのように貨幣の通用に影響を及ぼすものと考えられるのか、「資本の価値」の意義を踏まえ、理論的に攻究される必要がある。

3-2. 「資本」章の意義

貨幣論と資本循環論との関連については、資本循環論というマルクス独自の問題構制をなした背景に、古典派にはない価値形態認識があるのではないかと予想されるのであるが、価値の形態性についての認識と価値形態論そのものの形成、資本概念の深化、資本循環論の変容、などは並行してマルクスの中で進められていたものであるし、またそれがどれほどの対応関係を十分に持ち得ていたのかも判然とはしない。さらに、宇野における展開についても同様の関連づけをもって、流通論の独立化の意義などについて捉え返しを行っていく必要があるものと考えている。

資本循環からはじめて原価なり価値補填なりの観念が生じ、商品が内在する価値を表現するという関係がある内実をはじめて得る。そして、こうした価値表現行動の規範の成立とともに諸資本の競争の作用もあって、はじめて価格メカニズムが作動し、物価体系のあ

る安定性もたらされることにもなるのである。

先に見た、資本概念論（「資本」章）においては個別資本の増殖が問題にされるべきであるという山口の指摘は、その通りであろう。差異の媒介を通じて増殖を図る資本の運動自体は、個別のプロセスとして扱いつつ、そうした増殖の安定的存立が社会的にいかん担保されることになるのかについては、システムの問題として扱っていくこと。資本主義経済の基礎構造の理論的解明において、2つの問題の峻別は留意されるべきであろう。

資本の価値の問題は、Pや負債の評価の方法は理論的にはどう考えられるべきか、企業体としての価値や経営資源の意義を理論的にどう位置づけるか、といった課題をも提起していく。原論体系を通じた価値概念の彫琢は、この「資本の価値」の観念を踏まえ、さらに「企業の価値」などへと進んでいくことによるのである。

おわりに

貨幣論においては、貨幣の価値の特質が明らかにされるのみならず、商品の価値についても、それが単に商品間の関係性に応じた多様な方向性をもって存在している状態から、貨幣論の展開を通じて一元的な価値へと整序されていくものと論じられたのであった。

経済原論では、概念規定の演繹的展開の中で、キー概念たる価値の概念が、商品の価値、貨幣の価値、資本の価値、企業の価値、というように彫琢されていく。

資本概念の理論的精査は、資本主義の本質把握にとって、まさに本丸であり、資本の価値の観念もまた同様である。

本稿は、『資本論』形成史研究なども援用しつつ、このテーマに踏み込もうとしたものであるが、原論の体系性にも密接に関わる問題であるだけに、未だ検討途上の面は否めな

い。この研究ノートへの批判を仰ぎつつ、さらに研究を深めていくことにしたい。

【註】

- ① 株式会社論を分析基準にNPOについて理論的に検討した試みとして、勝村 [2005] も参照されたい。
- ② ただし、このような見方に十分な説得力があるということは踏まえつつも、その背後に、1) マルクスの経済理論は壮年から晩年に向けて完成の一途をたどっていった、2) 宇野の議論を尺度にマルクスの理論の完成度を判定する、という見方・態度(2は宇野派のものについて)が見え隠れするような感じもあり、個人的には若干の違和感が拭いされない。
- ③ この点は、勝村 [1999] のとりわけ第1節「価値形態の非対称性と貨幣の価値」を参照されたい。
- ④ 定在としての性格を主因に、一般性をも副次的要因として、貨幣は価値そのものの物差しとなることができるのではないか。「価値尺度=物差し」論の復権も考えうる。
- ⑤ この点は、勝村 [1999] のとりわけ第3節「売りと買いの分離と価格づけ」を参照されたい。

【参考文献】

- K. Marx の著作については、次の略記のもと、主に下記の訳書を参照している。
- 『要綱』 (『マルクス資本論草稿集 1857-58年の経済学草稿 II』大月書店、1993年)
- 『経済学批判』 (杉本俊朗 [訳] 国民文庫版、1953年)
- 『資本論』 (新日本出版社版、1997年)
- 宇野弘蔵 [1950] 『経済原論』 岩波書店 (本文中で「宇野原論」と略記)
- 大内力 [1981] 『大内力経済学大系 第二巻 経済原論 上』 東京大学出版会 (本文中で「大内原論」と略記)
- 小幡道昭 [1999] 「貨幣・信用論研究の課題」 (小幡編『貨幣・信用論の新展開』社会評論社 所収)
- 勝村務 [1999] 「貨幣の価値と価値形態論」 (小幡編『貨幣・信用論の新展開』社会評論

- 社 所収)
- 勝村務 [2005] 「ミッション志向企業としてのNPO」(SGCIME編『模索する社会の諸相』御茶の水書房 所収)
- 佐藤和則 [1993] 「資本の循環運動と費用・効率性の理論 - 『資本の流過程』論の諸問題 -」(東京大学博士論文)
- 日高普 [1983] 『経済原論』 有斐閣 (本文中で「日高原論」と略記)
- 日高普 [1977] 『資本の流過程』 東京大学出版会
- 宮川彰 [1993] 『再生産論の基礎構造』 八朔社
- 山口重克 [1976] 「貨幣・資本」(大内・桜井・山口編『資本論研究入門』東京大学出版会 所収)
- 山口重克 [1985] 『経済原論講義』 東京大学出版会 (本文中で「山口原論」と略記)